

『天理教教典』の後篇について、中山正善『天理教教典講話』は「我々の信仰の順序」、あるいは、「陽気ぐらしへの道」について書かれてあると説明している。すなわち、「信仰の順序」と「陽気ぐらしへの道」が同様の意味で用いられている。

『天理教教典』には、「道」のほかに「信心」「信仰」という言葉も使われている。それらの用例は後篇に多く、「信心」は第6章「てびき」と第7章「かしの・かりもの」にあわせて3回、「信仰」は第8章「道すがら」に6回用いられている。しかし、第9章「よふぼく」と第10章「陽気ぐらし」には「信心」も「信仰」も出てこない。「道」は第6章から第8章までは、それぞれ1回、2回、2回と用例は少ないが、第9章に9回、第10章には19回みられる。形の上からは、「信心」や「信仰」という言葉が使われなくなるとともに、「道」が多く使われている。

### 一般的な意味

これまで「信心」と「信仰」について、筆者は、「信仰」が明治期に faith や belief に対応する語として使われるようになったもので、「信心」はより古くから日本にある表現だという程度の認識しかなく、それほど意味の違いに注意してこなかった。しかし、上記のように、「道」と「信仰」が似たような意味で用いられることを意識しながら『天理教教典』を読んでいると、「信心」と「信仰」は同じ意味なのかどうか疑問として浮上してくる。そこで、まず事典や辞典によってその一般的な意味を確認しておきたい。

『宗教学事典』(丸善株式会社、2010年)においては、「信仰・信心」と項目がまとめられており、一般的な語義としては、「宗教」は、教え・儀礼・制度なども含む総体を意味し、「信仰・信心」は意識的な活動、心のはたらきを意味する」と説明されている。

『宗教学辞典』(東京大学出版会、1973年)においては、「信仰」は「献身の意味をふくみ、誠心を捧げて信ずるという意味」であるとし、日本が西洋文化を移植する以前の仏教では「信仰」に相当するのが「信心」で、「仏・菩薩の教えに対して微塵も疑心を起こさず清浄なる心で信ずる心」だと説明されている。

『日本国語大辞典(第二版)』(小学館、2000～2002年)では、「信仰」は、「神や仏などを信じようとぶこと。誠心を捧げて信ずること」とあり、「信心」は「仏語。一般に三宝や因果の理法を信ずる心」あるいは「神や仏の力を信じて、その加護を願って祈ること。また、その心」とされる。

ほとんど同様の意味の言葉として説明されるものの、「信仰」には「献身」というような行動を含むのに対し、「信心」はどちらかといえば「心」の状態だと説明されている。こうした点を踏まえて、『天理教教典』後篇の用例を取りあげたい。

### 「信心」と第6章「てびき」、第7章「かしの・かりもの」

後篇における「信心」の用例は次のようなものがある。「折角、てびきを頂いて、心を定めても、時がたてば、一旦定めた心もいつのまにか動いて、形ばかりの信心におち、…又もや、親心に反する心を遣うたり…」(第6章、61～62頁)／「と

もすれば弛みがちな心をはげまして、なおも心の成人を促される上から、信心するうちにも、…心を入れ替える節を与えられる。」(第6章、62頁)／「心の持ち方を正して、日々喜び勇んで生活するのが、信心の道である。」(第6章、72頁)

ここに挙げた引用文を見ると、「信心」という言葉が使われるとき、前後に「心」という言葉が何度も出ていることが分かる。3つめの引用の後には次のような文章が続いている。

即ち、身上かしの・かりもの理をよく思案し、心一つが我の理であることを自覚して、日々常々、胸のほこりの掃除を怠らず、いかなる場合にも、教祖ひながたを慕い、すべて親神にもたれて、人をたすける心で通るのが、道の子の心がけである。(72頁)

つまり、「信心」とは「心がけ」であると、心に焦点をあてて説明されている。その中身については、具体的に、かしの・かりもの理、八つのほこりという教理を挙げられ、親神、教祖を信じもたれて、人をたすける心になることが説かれている。

### 「信仰」と第8章「道すがら」

「信仰」の用例は次のようなものである。「親神のてびきによって信仰に入り…」(第8章、74頁)／「一度は、教に感激して信仰に志しても、やがて喜び勇めなくなることあれば…」(第8章、75頁)／「親神の胸に抱かれ、ひたむきに信仰に進むものは、我が身にふりかかるいかなる悩みや苦しみにも、溺れてしまうことなく…」(第8章、75頁)／「身上のさわりも事情のもつれも、己が心の糧となり、これが節となって、信仰は一段と進む。」(第8章、76頁)／「ひのきしんは、信仰に燃える喜びの現れで…」(第8章、78頁)／「欲を忘れて、信仰のままに、喜び勇んで事に当るならば、それは悉くひのきしんである」(第8章、78頁)

「信仰」という言葉によって、ここに引用したように、「信仰に入り」「信仰に志し」「信仰に進む」「信仰は一段と進む」「信仰に燃える」「信仰のままに、喜び勇んで事に当たる」との順序が説かれている。それは、後篇では第8章にのみ出てくるわけであるが、二つ目の引用の次の文章に、「心を倒さずに、喜び勇んで明るく生活するのが、道の子の歩みである」(75頁)と、信仰は「歩み」であると説かれている。その中身については、この章において「たんのう」「ひのきしん」「誠真実」という教理が、信仰の歩みとともに説かれている。

### 「道」と第9章「よふぼく」、第10章「陽気ぐらし」

このように、『天理教教典』における「信心」と「信仰」を確認してきたが、前者は「心がけ」に、後者は「歩み」に焦点があてられていることが読み取れる。そして、後篇は陽気ぐらしへ歩んでいく足取りが書かれているのであるから、第6、7章においてまず「信心」の心がけ、次いで第8章で「信仰」の歩みが順序だてて説かれている。そして、第9章、第10章においては「たすけの道」と説かれている。それは、「よふぼくの進む道」(88頁)であり、教祖によって教えられた「ひながたの道」(89頁)、「親神の道」(97頁)であるというのである。